

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

83

「人間にとつての幸福感とは何だろうか。いかに生きるべきか。人はどこからきて、どこへ行くのか。いかに生きるべきか」。今、「五葉山の魅力」リレーエッセイが、私に問いかけています。

人はそれぞれ悲しみや苦しみ、つらさを抱え、思い悩みながらも人を愛し、愛され支え合いながら生きています。そのことを思い起こす出会いがありました。

二十八年前、友人の結婚式に出るため住田町を訪れた時のことです。晩秋の景色が広がり、種山を越え住田に入ると赤や黄に色づいた木々が私を迎えてくれました。

道に添うように流れる大股川は季節の移ろいを集め、映し出し、流れていきます。まるで人を吸い込むような情景でした。

秋色が山肌だけでなく、山峡の里をも染めた風景は、私をゆったりとした気持ちにさせてくれました。

それは友人を育んできた風土の匂いであり、香りでもありました。柔らかい口調で静かに語りかけ、いつしか人を引き込んでいく友人は、こうした土地で生まれ、育ってきたことを感じさせたのです。

困気を持ち、くつろがせ、居心地の良さをもらったのです。

翻って都会はどうでしょう。暮らしていく上で不便や不都合を感じることはありませんが、人と人の結びつきが薄く、弱いように思います。私

二泊三日の住田への結婚式の旅でしたが、住田の地が気兼ねさせない雰囲

「風景」に思う地域の絆

北海道札幌市

森

由紀夫

また、映画監督の澄川嘉彦さんは、「森の木々は、みんな力を合わせて立っている。(中略)冬になって葉を落とした木々を見上げればよくわかる。まるで陽の光を分け合うように、それぞれ

の木々の枝が仲良く青い空を分け合っている。たくさんのおたが励ましなが

つながらの中に生きています。お互いに足りないところを補い合い、助け合っています。必要でない人はいないのです」と西條一恵さんは述べています。「人は支え合う存在である」というのです。

幸福感到帰着させることこそが希求されているように思えてなりません。

私は、このリレーエッセイと出会い、「生きる」という本源的な意味を考へ続けています。今日の時代において、「一人ひとりの存在を大切にし、お互いを承認し、認め合うこと」の大事さをあらためて知ったのです。幸福感を実感できるか否かは、一人ひとりが生きて

経済効率優先し、市場原理主義が貫徹されるほどに一人ひとりの存在が薄く不確かなものになっていきます。それだけに、地域社会の疲弊が言われている今日において、本来の人間の営みとしての活動と、その成果を個々人の人生における

るかどうかにかかっているのではないのでしょうか。

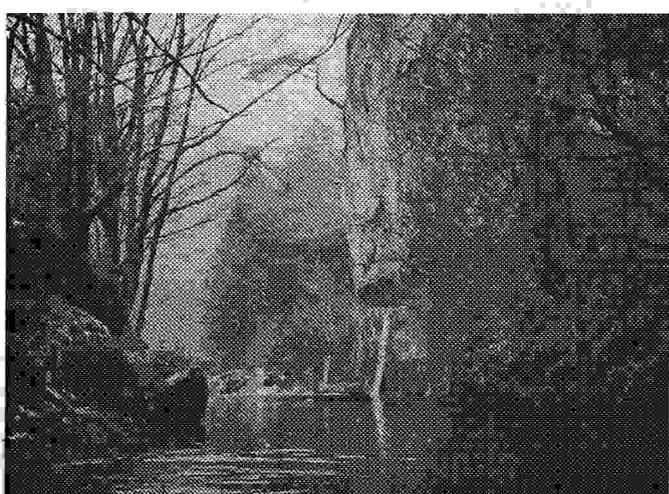
【執筆者プロフィール】一九五四年生まれ。北海道帯広市で生まれ育ち、学生時代を仙台で過ごす。現在、札幌市で団体職員として勤務。

っているのだ」と森の木々に共に生きる姿を見いだしています。



生活に便利で機能的に優れている都市は、一見

を個々人の人生における



風景は心落ち着かせ、ゆったりした気持ちにさせる (鏡岩せせらぎ公園＝住田町)